

第2回旧遷喬尋常小学校校舎整備・活用検討委員会概要

日 時 平成30年7月31日(火) 午後3時

場 所 久世エスパセンター会議室

出席者

委員) 岡山理科大学工学部建築学科教授 江面嗣人、まにワッショイ代表 岡本康治、真庭市立落合小学校校長 奥山仁、東京大学生産技術研究所教授 腰原幹雄、真庭市文化財保護審議会委員 森上知洋、シネマニワ代表 山崎樹一郎、岡山ヘリテージマネージャー機構美作地域会 山崎真由美、真庭市副市長 吉永忠洋

「開 会」

(大塚スポーツ・文化振興課長)

ただいまから、第2回旧遷喬尋常小学校校舎整備・活用検討委員会を開会します。

先般、旧遷喬尋常小学校整備・活用プロジェクトチームを立ち上げております。

これは、本検討委員会のご意見を具体化するための実行組織と位置付けております。

また、気運の醸成を図るべく、支援組織の立ち上げを検討することとしています。

本日もメンバーが傍聴に来ております(職員紹介)。どうかよろしくお願いします。

開会に先立ちまして、江面会長からご挨拶をいただきたいと思います。

また、続けて「文化・文化財・創造的活用について」江面会長より議題提起をいただきたく、勝手ながら事務局より依頼をさせていただいております。

今回の協議事項であります利活用について協議をしていただく前に、文化や文化財に関して皆さんと意見交換し、共通の理解をしていただき、次に進みたいという思いからお願いしています。

「挨拶(文化・文化財・創造的活用について)」

(江面会長)

「文化財の創造的活用」が私の主張

文化財を活用していく一番重要な点は、単なる物の利用ではなくて、それを通じた人づくり、教育に至るべきだろう文化財の活用、その最終的な方向性は、いかに現代の世の中や人づくりに役立つかということ

地方分権、地方の自立が言われているが、地方の個性とか多様性の重視、住民・国民が中心になるべき。

まちづくりという新しいものを創っていくときに、地域の歴史というものが、大きなファクターとなるはず。

文化財保護法には、「この法律は、文化財を保存し、且つ、活用を図り、もって国民の文化的向上に資するとともに、世界文化の進歩に貢献することを目的とする。」と規定されている。

「もって国民の文化的向上に資する」という言葉は、明確に国民のための文化財と書いてある。

明確に国民であって、曖昧に日本とか、県であってはならない。

「文化財の保護」とは、保存して、活用をすることだけでは終わらない。その先に文化的向上がある。

文化的向上は何を意味するのか。

歴史学を考えた中で、文化的向上は、人間の精神性の向上なのだという結論に至った。

そもそも文化財とは、何を伝えようとしているのか。文化財とは何なのか。

太田博太郎の日本建築史序説に、「伝えようとするのは、そこに作られた物自体ではなくて、精神を担う形であり、物は、結局精神を表わすための手段である」と書かれている。

文化財の背後にある価値、精神を表に引き出している。

例えば、日本の神社建築の発展を考えると、神社建築の背後にある山とか岩とか、神の象徴であると、単なる構造物ではなくて、何かを象徴するものである。建物の背後にそういった精神がある。

そういったことを見ていくことが大切だと思っている。

これは、芸術と極めてよく似ていると思っている。

芸術というのは、1つの作品によって感動をもたらす。その感動が人を創っていく。

人の成長には、感動が必要で、欠かせないものだ。

音楽をやっても音符の羅列ではない。文学にしても活字の羅列ではない。その背後にある精神性が要をなす。

さらに、芸術はすべて個別的なあり方である。

例えば、ピカソの絵画ゲルニカは、戦争の悲惨さを表しているが、個別の作品から普遍的なものを見せていく。

近代合理主義の学問からいうと、個別性の集まりから普遍性を説明するわけだが、一旦、普遍性が明確になると、個別性が意味を持たなくなる。

しかし、芸術というのは、個別性を失って普遍性だけが浮いているわけではない。個別性は絶対必要である。

文化財についても同様なことが言える。

日本独自の空間が育てるものとして、芸術と共通性があると思う。日本人の精神とか、文化を伝えるもの。

では、文化とは何なのか。

広辞苑で引くと、「人間が自然に手を加えて形成してきた物心両面の成果。衣食住をはじめ技術・学問・芸術・道徳・宗教・政治など生活形成の様式と内容とを含む」とある。

考える例として、「床の間」の発展について説明をしたい。

「床の間」の発展の歴史をみると、日本で発展して、極めて日本的な空間であることが分かる。

「床の間」があるということで、空間に上下というものを形成する。一種、神聖な場所である。

日本人は学校教育で習ったわけではないが、空間意識を持っている。

床の間の空間が生活習慣の中に組み入れられてきた。

それが、日本の住文化の1つであって、経験によって、やがて受け入れて、日常化していく。

歴史的空間がなければ日本文化は守れないというのが、私の主張。

文化財が担うもの、なぜ残さなければいけないのかというと、歴史的な建造物というのは、消失すれば、極めて重要な日本文化の一部を失うことだ。

「国民の文化的な向上」とはなにか。

芸術の意味などを併せて考えると、精神的な向上、意識改革につながっていく。

つなげていけるかどうか、大きな鍵になる。

精神的な向上とか、高度な精神性の獲得というのを最終的な目的とすべきと思っている。

日本人の文化の形成、個性においても、歴史的なものは、極めて個性的で、比較することができない。

2つとない空間を守っていくとすると、高い意味を持っている。

「創造的活用」とは、どういうことか。

昭和時代に高度成長期を経て、どんどん都市化が進んで、文化財が無くなってしまった。

そういうものを一部残しておかないといけないということで、用途変更をして、銀行として使っていた建物を別の用途で

使って残すという緊急避難的な活用があった。

文化財保護法の「国民の文化的向上に資する」ということがあるとすれば、そのように別の用途で使うことが活用なのか、活用にはもっと高い意味があると思う。

保護法が意図する本来の活用というのは、文化的向上のための保存であり、活用である。

それと、人間を創るための創造的活用ということが出てくる。

文化財とは、そういうものなので、決して偽物であってはいけない。本物によって、人を創るべきだ。

文化財をとおして文化の理解を深め、人の精神的な向上、高度な精神性の獲得という意識の改革による人づくりを目的として、文化財を創造的に活用することとしている。

最も高度な創造は、人間の創造だと思う。

「創造的活用」という意味では、1つの要件がある。

基本的には、文化の理解である。

これには、相互依存性、個性を失わない普遍性、地域性をファクターとして持っていることが不可欠である。

常に高度な思想性と、何のためにという規範性を持っていないといけない。

文化財の創造的活用の目的は、意識改革によるひとづくりとっている。

物・人間の新たな創造的関係の構築とも言える。

そういうもののあり方が循環をして、人間を育てていくことについて、人間が本来持っている徳性の強化を図る。

つまり、文化財をとおして、希望、信念、慈悲、寛容などを教えていく。

それが生きる力、持続的な総合強化とかに転換されていく。そういう好循環を考えていて、いかにできるか。

人格形成、人間育成、人間教育を目指している。

そういうものが、いかに、地域の中で構築できるかという部分がある。

今回の旧遷喬尋常小学校の中に、実際にどうできるかというのが、非常におもしろい話。

それが1つの思想的なものを創りあげ、真庭の地域づくりの中で、人づくりが行われていることが重要だと思っている。

幼稚園の創設者として有名な教育者フレーベルは、「自分が生まれ育った生活や地方のことに精通しており、自分の近隣の自然や、自然の産物のことを詳しく知っていること」の価値を語っている。

地域のことをよく知っている。それが高尚な精神性から、生き生きとした確かな感情を与える。

地域のことを知ることは、生き生きとした高度な精神性につながっていく。

人間として、市民として、この学校をどう考えるのかということに広がっていくことが大事である。

これからの世の中は、大きな物語で全体がくれるのではなくて、極めて小さな物語の時代だ。

日本全国をくれるような考え方ではなくて、真庭市は真庭市で、地域の中でどう生かされていくか、どう働いていくか、決して日本全国につながることはない。

小さな物語で多様化していくわけだが、大事なものは、そのせめぎ合いに堪えるような強さを持つこと。

今回、活用を含めて考えていく中で、地域の強さを住民がどのように獲得をしていくかが、大きな課題になる。

それを明確に意識していかないと、単なる使っているというだけになってしまう。

単なる緊急避難的な活用になってしまう。本来の活用にならないのではないかなと思う。

(腰原委員)

金銭的に収益を上げるとか、観光の目玉にしようというのが、文化財の活用のイメージにあると思う。

収益、維持費を生み出さなくても良いのか、生み出すために活用するのか、どういうふう考えたらよいか。

(江面会長)

お金を追求してはいけないということではなくて、より深い問題意識と、より人間的な目的を持たないと長続きしない。いろんな保存会でも予算を得るためにやるが、ほとんど長続きしない。途中で空中分解してしまう。観光などによって地域にお金が落ちることは、恒常的に皆さんと知恵を出し合っていないといけないと思っている。しかし、それだけのために、文化財があってはならないと思う。現実的には長続きしないというのがある。旧遷喬尋常小学校をどう活用するかは、ここだけで終わる話ではなくて、やはり次々の展開、好循環、持続的な発展に寄与していくきっかけが次々生まれてこなければいけない。いつも話をするが、結論は絶対はないということだ。これが正しいという結論は絶対はない。結論のない中で、何を得ていくかが大事である。市が永久に発展していくには、永久に課題があるということだ。市民が育って行って、それに対応できるように成長していくのが理想だ。儲けることを考えないということではなくて、むしろ具体的にどうするかを考えるべきだと思う。いかに利潤を追っていくかを考えていけないといけない。逆に言うと、それなしには持続できない。

(腰原委員)

文化財なのだから金儲けをしてはいけない、もっと行政が積極的に支援すべきだと言われるケースもある。行政と民間のどちらかが疲れたときに、どちらかが頑張るといことができないかなと思っている。

(江面会長)

最終的には、人間に帰する、物に帰する。人間と物が両方幸せになる。生きる力を向上させる。そこに帰する。生きていく力、こういった課題がないと成長できない。逆に言うと、課題を使って、真庭市の力にしていく。そのように展開できればいいなと思っている。

(腰原委員)

現在、この小学校自体が、一般の市民の方が使える場だという意識を持って活用がされているのかというのが一点。教室とか講堂というと、このエスパセンターと被っているのではないか。

(有元部長)

言われるとおり、旧遷喬尋常小学校で一番の課題は市民の利用が少ないということ。どんどんイベントをやるのがいいのかというのはあるが、楽しんで過ごせる場になっていないというのを如実に表している。元々この一帯をエスパランドということで、旧遷喬尋常小学校を含めて、エスパスのホールであるとか、学習室であるとか、一体的に利活用するという考え方があった。旧遷喬尋常小学校については、具体的な検討がなされていないというのが現状であり、反省点である。そのために改めて、検討委員会を立ち上げた経緯がある。

(吉永委員)

以前に使用料を示した条例があったが、何年か前に教育委員会で廃止した。原則は使えない状態だ。

(森上委員)

原則使ってはいけないとしていたものを、今後使おうとしている。耐震がもたないのであれば、解体して、耐震補強をすることを考えていけないといけない。もつのか、もたないのかが先ではないか。

(江面会長)

どちらが先かという、どう使っていくために、どういう補強しなければいけないのかということだ。
使えないから使わないというのではなくて、今後どのように使っていくから、どういう補強をしなければいけないかを議論しなければならない。文化財は使ってはいけないというのは、どこにも書いていない。
今は、木造の修理方法が確立している。使い方にあった補強、保護方法がある。修理技術も世界トップである。
多少壊れても修理をしていくということを考えながら、使っていけないといけないよね、というのが近年の考え方だ。

(腰原委員)

改修については、やる気次第だ。技術はある、お金がかかり過ぎますよというもある。
そのときにどう使うのか、どうしたいのかがあると、コストとのバランスもできるようになる。
耐震補強という、壁を足さないといけないとか、使いにくくなるというイメージがあったが、技術がかなり進歩している。
どうしたいかということと考えたら、そんなに我慢しなくても、耐震補強できる仕組みになっている。
構造の方は、何かはしなければいけないが、何かをすれば十分安全に使えるという前提で、活用について議論をしていただいたら良いのではないか。

外観を変えないで頑張るか、外観を変えてもよいと判断するかを少しずつ考えていかないといけない。
技術はたくさんあるが、コストとのバランスもある。
この建物の価値は何なのか、上から被せても元に戻るよというような修理方法もある。
いろんな選択肢があるというように考えていただいたら良いのではないか。

(江面会長)

昔は、耐久性、より長く持たせることに予算が出ていた。
現在は、活用も含めて修理だと考え、こう使いたい、こう生かさないといけないとなったときにも予算がつく。
修理の中に現場公開のお金も含まれている。どう使っていくかが明確になれば、文化庁は付き合ってくれると思う。

(吉永委員)

旧遷喬尋常小学校は国の重要文化財だが、一小学校で他にもたくさんの小学校はある。
これだけ残こして、耐震補強をする。全国からすばらしい方々に来ていただいて議論をしているのも、ここだけ。
これは一体何なのか、どう使うのか。真庭市民の心の中で、どのように残っていくのかというあたりを整理して、そのためにはどうするのか。会長が市民運動という言葉を使われているが、コンセンサスを取っていかないとけない。
これはこう使うという提案を市民に対してすることによって、100年残すのか、50年残すのか、200年残していくのか、それで市民の浄財を使うことができるというように思っている。
我々としては、市民の心の故郷である小学校であるということと同時に、日本にこういう小学校があるということを知っていただきたいし、価値を上げていただきたい。その中で森上さんが言われたことが次の課題なのだろうと思っている。
ぜひ、議論を深めていただければと思っている。

先日、真庭市はSDGs未来都市モデル事業の全国10か所に選定された。
29地区あるが、10地区だけモデルで予算がついて、だいたい6千万円。
未来に向かって投資をするのだが、その中で旧遷喬尋常小学校に予算をつけようと申請をしている。
小学校の1室に、打ち付けるようなことをしない棚を作りたいと思っている。
真庭のコップや木のおもちゃを並べて売りたいと言っている。
コーヒーを飲めるスペースをつくりたいということで、予算化をしている。

儲けようという話ではなくて、来場者に付んでもらえる時間をつくりたいと思っている。

（江面会長）

遷喬尋常小学校なら遷喬尋常小学校らしい生かし方があると思う。

これから文化財の活用は、観光とかまちづくりとか、現実に発展するものがないと、そういうものに結びついていかないといけないという考え方もある。

（森上委員）

ある所に行ったら、小学校の6年生がボランティアでガイドしてくれた。真庭市でも、ガイドの育成ができれば良い。

（江面会長）

人づくりは、大人だけではなくて、幼少の時代から絡んでいくようなことが大事。

この小学校があるからボランティアができるということにも価値がある。

ボランティアも、子供の時代から、自分たちである程度、研究をして勉強をしないといけない。

非常に良い案と思うので、やれるようなことを考えてほしいと思う。

（奥山委員）

校長先生の命令でもできないことはできないが、総合学習に力を入れている学校は、十分素地があると思う。

そのような話を聞いただけで、授業を組み立てる力を持った教員はいると思う。

（山崎樹委員）

それは、誰にとって良いことなのか。

（吉永委員）

子供にとって良いことだと思う。

子供が自分の地域を、自分で語るということは、ものすごく大きくて、心の中に残るものがある。

（山崎樹委員）

小学生が地域の歴史を自分の解釈をもって人に伝えることができるのか。

教えられたことは、できるかもしれないが、子供にやらせている感が気になる。

（吉永委員）

例えば、成人式の司会で、子供が出てくることがあるが、子供はそれが経験になる。

押し付けられたといえどもそうかもしれないが、子供は、やる気満々でやってくる。

（山崎樹委員）

うぐいす嬢的に見えてしまう。

（腰原委員）

最初は、自分の言っていることを理解しなくても、地域にこういう財産があって、外から来た人が喜んでくれた。

自分たちが持っている財産、資源に価値があることを認識すると、興味を持って、さらに自分から研究をしようとなる。

自分の自慢になってくると、地域のことをすごいねと聞いてくれると、地域に誇りを持てるようになる。

(山崎樹委員)

何でそういったことを言ったかという、観光と建物の地域文化としての価値や交流の場としての活用は、一緒にたにすると、行ったり来たりする。

今日は交流の流れだったと思うので、地域に落とし込むにはどうしたら良いかを考えている。

先日、フランス人映画監督の特別授業が、旧遷喬尋常小学校で、遷喬小6年生60人ほどを対象に実現した。

監督は、待ち時間に小まめに建物を観て「素晴らしい」と。

真庭に来て、これを観られて良かったというぐらいの感動をしたと言っていた。

多分、私たちが観るよりも海外の人たちが心を打つ場所なのだと思います。

建物と映画ができた時期は、110年ほどで、ほとんど同じ歴史。

映画が世界の窓として、機能してきたことを、この建物でできるということは、すごうれしかった。

子供が世界の窓を見るという、こんな山の中でも、映画を観れば世界の文化を知ることができる。

それが知ではないか。

映画をとおして、知を取得し、増やせるような場所になれば良いと思う。

(江面会長)

旧遷喬尋常小学校という物理的なものがある、それに何か関わることで、関わった人間、つまり発信する側も、ゲストもホストも新しいものを見つけるきっかけになれば良い。

(山崎樹委員)

他でやるイベントとまったく違う。関わった人の感動というか。

(江面会長)

まさに、その感動だ。感動が人をつくっていく。重要文化財ともなれば、感動できる要素を簡単に見つけられる。

それをうまく利用して、関わった人間の能力や感動を引き出すことによって、人間が成長していく。

先ほどの小学生のガイドも重要文化財で試せば良い。駄目なら続かないはずだ。

きっかけによって、何かができれば、感動、褒めてもらって喜ぶことの繰り返しが続いていく。

持続可能な何かのエネルギーが得られなければ、所詮潰れていく。

観光だけに特化して、金儲けだ、金儲けだと言ってやっていると、どこかで潰れていく。

いろんなことを試して、続けられていくものは何か、得られていくものをどう見つけていくか、試行錯誤をしていく。

先ほどの小学生の例は非常に面白い。ゲストも感動するし、ホストである小学生も何かを感じる。

これは通ずるものがある。そういう繰り返しをどう作っていくか。

(吉永委員)

エスパスと旧遷喬尋常小学校の関わりをどう差別化しているのかと腰原委員が言われたが、同じことをやるのであれば、どこでやっても良い。あそこでしかできないことを整理しないといけない。人が集まって目立てば良いという話にはならない。

(山崎樹委員)

旧遷喬尋常小学校でしかできない訳ではないが、そこでやれば、他でやったのとは、まったく違う感動がある。

建物にすごい魅力がある。すみ分けというよりは、むしろ、どんどん旧遷喬尋常小学校でやっていくべきだ。

(腰原委員)

500人で集客するとギャラが決まってしまうので、有名な人を呼べない。

旧遷喬尋常小学校のように特殊な建物だと集客人数が少なくても、興味を持って来てくれる。

旧遷喬尋常小学校なら来てくれるチャンスがあるというやり方はある。

あそここの場、あの遷喬小というのを売りにして、普通では呼べない人が呼べる、交流できるというのを積極的にやる。

学校の価値が見い出されていくのだと思う。

(江面会長)

一目見て、すごいなと価値が分かる人には分かるが、やっているうちに価値が見い出されていくこともある。

それが時間の経過と共に、携わることによって、価値が増幅していくことがすごいなと思う。

(吉永委員)

私が言いたかったのは、市民からすると旧遷喬尋常小学校を使うのは、誇りであったり、愛する象徴であったりする。

一番は、まちの人が旧遷喬尋常小学校をどれだけ愛するかということに最初の切り口がないと、単に景観が良いということではやると、長続きしない。

(山崎樹委員)

それなりにやる方にも覚悟がいる。どこでやっても良いイベントを旧遷喬尋常小学校でやるということではない。

(吉永委員)

私たちが講堂で落語を24年やっているが、ゴザを運んでセッティングをしている。それを愛して何十年も来る人がいる。

そこが意味なのだろうと思う。

(江面会長)

通常の文化ホールとは、まったく違った意味を持つ。まったく異なった空間だ。

(腰原委員)

そういう意味では、ライバルとか、旧遷喬尋常小学校以外の木造小学校と、比較をしてみたことがあるのか。

学校の価値というときに、絶対的評価は行けば感じるのだけれども、まず、相対的な評価として、この学校というのが、どういう位置づけなのか。

小学生にガイドをやって頼んで、教えようとしたら、全国にこんな学校があって、この学校はこうだよというところからスタートすると思う。

絶対的にこの学校が良いという考え方もあるが、相対的に世の中にどんな学校があって、この学校が特殊なのだよという意識が持てるかどうかというものもある。

観光のために、囲い込みをして、リピーターを増やしましょとやっているが、日本人は、同じところに何回も行くというよりは、違うのを観たいと思っている。ぐるぐる回っている人たちは同じ趣味だから、同じような学校は見てみたいと思う。

同じような学校を持っている人は、同じ悩みを持っているので交流してみると良い。

木造小学校のグループか、チームをつくってみて、お互いに良いところを紹介し合うというのも1つの方法だ。

その中で、遷喬小学校の価値は一体何なのかというのが、子供たちには見えやすくなる。

子供のガイドには、バスツアーをやってあげるぐらいのことをしてあげて、他の学校を観て回り、この学校の価値は何とというのが教育ではないか。

私でもこの学校の説明とか、全国の学校の様子とか、この学校の位置づけはいくらでも説明できる。
それを自分の言葉にできるかどうかは、観て、体験しないと自分の言葉にならない。
観て回りたいと子供が思えば成功だし、この学校の価値が自分の言葉で話せるようになるのが、教育ではないか。

重要伝統的建造物群保存地区だって、109 あるのなら、同じ所を何回も行くより、違う所を回る方が楽しいよねと
いう話になる。小学生同士の交流があるところまで広げる。
ガイド同士が学校を巡り、交流して、建物教育を発信するというのも、まだどこもやっていないのではないか。

(江面会長)

いろんな広がりがある。説明をしようとする、分からないことが出てくると、自分で調べたりするきっかけになる。
1つのやり方に意味があるとすると、いろんなファクターで広げられるということがある。
ぜひ、小学生のガイドをやってみれば良いと思う。

(腰原委員)

興味のある人だったら、ここだけではなくて、多様な建物、似たような空間を求めて広がっていく。
興味のない人を集めましょうというより、まず興味のある人を集める方が盛り上がるのは早い。
あとは、興味のない人にどうやって伝えていか。

(江面会長)

広がっていくと同時に、深めていくことをもう1つしないといけない。
小学生や一般の人でも良いけど、興味をもって、この建物に関わって、何かを活動していく中で、価値がだんだん上
がっていく。その価値って何だろうと、期待を与えていく。
広がっていくこともだけど、一人一人の考え方をどうやって深められるか考えていかないといけない。
岡本さんがやっている学校給食もきっかけとして、人を呼べるけれども、その人たちが旧遷喬尋常小学校の知識をど
れだけ深められるか。関わっている人がどれだけ深められるか。次の段階として、考えてほしい。

(岡本委員)

最初は、周りからは、古い立派な建物があるじゃないと言われていたが、気にならなかった。
使わせてもらってから、だんだんその価値に気が付いてきた。この建物があるじゃないかと自信になってきた。
この建物があるから人が来てくれる。修学旅行の生徒がまちに来てくれ、講堂で給食を食べてくれた。
自分たちのまちに、まさか修学旅行が来てくれるなんて思ってもみなかったが、3年間続けて来てくださった。
観光という面もあるのだが、このまちの人をみてもらいたいという思いがある。
リピーターも多く、だんだん顔見知りになって、いろんな人を巻き込んでいる。

(吉永委員)

観光地域づくりをやっていて、お金儲けの観光はあまりやる気がない。
真庭の人をみてもらおうと、リピーターを中心にして、そういう意味で観光を整理したい。
儲かることは必要ないのだけれど、維持費ぐらいは出したい。

(岡本委員)

商人としては、儲けたい。
それだけではなくて、自分たちも満足して、来てくれた人も満足してもらって、儲けに繋がれば悪いことではない。

(吉永委員)

真庭市としては、民間の人には儲けてもらって、市の価値が上がる仕組みができれば、意味がある。

(山崎真委員)

儲けるという話で聞いてみたいが、いかに旧遷喬尋常小学校を愛されキャラにするか。

元々9カ町村が1つになった市なので、この建物を市民や遠方の方々に愛してもらおうか。

維持管理費だけでなく、儲けてもらって、その資金をいくらか、文化活動や市民のために使うことができないのか。

遷喬小学校を活用して、お金が循環し、自分たちの活動費に戻ってくるような、うまい仕組みを提案したい。

(山崎樹委員)

旧遷喬尋常小学校は、久世のものでしょという感覚が真庭市全体にあるのが実情。

合併して10年以上経っているが、全然一緒になっていないという感覚がある。

久世だけが潤うのではなくて、真庭市全体に還元されるうまい仕組みが必要。

(吉永委員)

一番気になっているのはそこで、遷喬小学校以外の人はどう思うかが気になる。

1つのやり方として、観光によって、外の人がいいねと言ってくれることで、価値が共有できないのかなと思う。

(有元部長)

地域のまちづくりとの連携という観点、活用もお願いしたい。

久世地区の人は、まちのシンボルとして、校舎を誇りを持って見つめていると思う。

この活用だけという単体ではなくて、市全体といえば広すぎるが、最低でも久世の中心市街地、駅から商店街を含めて、役割分担しながら連携しつつ、どう活用ができるのかという観点として持っていたきたい。

全体の真庭市の成熟のために、ここがどういう役割を持つのか考えていくと、ここだけで維持管理を完結させるということではなくて、赤字が出て他で儲ければ良いのではないかという考えもある。

単体ではなくて、面的な連携、利活用について考えていただければと思う。

(奥山副会長)

旧遷喬尋常小学校は、久世のものである。

何をしたら、もう少し全市的な関わりといいますか、好きになってもらうことができるか。

出会いがなければ、好きにもならない。真庭市民を市民優先で、ツアーにする。

どんどん受け入れる中で、愛着を持ってくれる。地区の人にも、もっともっと来てもらわないといけない。

それが呼び水となって、都会に出ている人を呼んできたりすることになると思う。

(森上委員)

旧遷喬尋常小学校は久世のものということで、市内の人で入ったことがない人が多い。

真庭市も急激に広くなったので、文化財がたくさんあるが、どこにどんなものがあるか、ほとんど知られていない。

国・県・市指定の文化財がものすごくたくさんある。

写真展示など、旧遷喬尋常小学校に来れば分かるようなことをしてくれれば、かなり良い気がする。

(江面会長)

旧遷喬尋常小学校を核として、1つのきっかけとなって、他の文化財でも使える。

他の文化財では関係なかったのが、展開して、新しい発見が次々にまちの人から出れば良い。
将来的に遷喬がきちんと例になれば、自分たちもという人が出てくる。とてつもない大きなことが無制限にある。

（腰原委員）

整備については、段階的にどうやっていくかが大事。
耐震や老朽化が不安だから、全部改修しましょうといえば大変なので、まず部分的に行うということもある。
全部を耐震補強をするのではなくて、優先的にする箇所と、後回しにする箇所とにすることもある。

（江面会長）

もう少し、基本的な構造補強はどうあるべきかというのがある。
段階的にやるにしてもそのことを含めて、将来的にはこうだけでも、今やっても良いのはこの部分だとか。

（腰原委員）

本日は、個別の細かいことより、まずは地域の良さを自覚しようという議論が多かったのかなと思う。
地域を知りたい、知ってもらいたいという視点が強いのかなと思った。
自分の具体的アイデアとして、世の中は衣食住なのに、「住」を通して地域を知るという教育は、今までの学校教育の中には無いし、学び直しという意味でも、この学校がそういう場になれば良いと思う。

（山崎樹委員）

会長からも建物を観るのではなく、心だったり精神だったりを観るのだという話があった。
その知が建物を介して、また住民に還元されると。

（江面会長）

基本的なことをだれかが押さえておかないと、わあっとなる。明確に行政がコントロールしてやっついていかないと長続きしない部分もある。市の体制、考え方を持っていないと、答申出たら終わりではない。
次々に引き出していく、考えていくシステムをつくっていかないと、行政が認識をしていないと終わってしまう。
やはり持続的な展開でなければいけない。

（大塚課長）

最後に会長から市側もきちんと答えを持っていないといけないと言われた。
市としてしっかりとした方向性を持って進んでいきたいと思います。
次回10月18日木曜日ということで、会長からも言っていました。皆さんぜひご都合をつけていただいて、出席をしていただきたいと思います。
閉会のごあいさつを奥山副会長よりお願いいたします。

「閉会」

（奥山副会長）

江面会長より、文化・文化財・創造的活用についての講義をしていただいた。
特に、会長のお話で、何のためにやっているのか、目的の明確化を話された。
簡単に言えば、人づくりが大事なのですよ、ということが再確認できた。
地域が元気になり、ついでに儲ければ最高である。
いろんな方面に意見が出たので、次回第3回の委員会につなげていただきたい。

いずれにしても真庭の宝の1つです。真庭の宝、旧遷喬尋常小学校を本当の宝にするために、積極的な関わりを今後ともどうかよろしくお願ひしたい。

午後5時44分閉会